わたしはせんそうを知らなかった

一宮東部小・２　松井　あやさ

わたしのひいばあちゃんはとよ川海ぐん工しょうではたらいていました。わたしは、そこはどういうところか知りませんでした。そこで、海ぐん工しょうてんへつれて行ってもらいました。

海ぐん工しょうは、海ぐんのぶきを作っていたのでじゅうの玉がかざってありました。ばくだんのもけいもかざってありました。お母さんが、

「こんなに大きくおもいばくだんが、とよ川におとされたんだよ。」

と教えてくれました。その、はへんもかざってありました。もってみたら、ずっしりとしていて、てつのようにかたくておもかったです。そのはへんがはしらに当たって、きずついていたものも、かざってありました。ぎざぎざしていて、とてもふかくきずついていました。これがとんできたと思うと、とてもこわいです。

家に帰って、すぐひいばあちゃんに、

「せんそうのこと、もっと知りたいから教えて。」

と言ったら、ひいばあちゃんが

「いいよ。」

と教えてくれました。十二さいの時にせんそうがはじまって、十四さいからはたらくのは、たいへんだと思いました。ひいばあちゃんは、火やくこのそばでじゅうの玉の一ぶを作っていました。それをしかのかわでみがくしごとをしていたそうです。その時、てきのひこうきが来ました。にげるめいれいがおそかったので、たくさんの人がしんでしまったようです。ひいばあちゃんは、

「お友だちもしんじゃった。」

とかなしそうに話してくれました。正門の近くのおいしゃさんがいるところが一ばんひがいがひどかったそうです。北門からにげた人は、ぶじだった人が多かったそうです。ひいばあちゃんは、北門からにげました。にげたあと、女子りょうに足がなくなったり、おなかの中が見えている人をはこんだそうです。ひいばあちゃんは、

「けがした人をはこんでください。」

と言われましたが、はこぶ時に気分がわるくなってしまってできなかったそうです。わたしがひいばあちゃんでも、心がいたくなってこわくてはこんであげることができないと思います。

わたしのひいばあちゃんは、子どものころにすごいけいけんをしてきました。今のわたしたちの生活では、そうぞうできないことばかりです。しかし、海ぐん工しょうてんへ行って、せんそうのこわさが少し分かりました。ひいばあちゃんがもし正門からにげていたら、ばくだんが火やくこに当たっていたら、わたしたちは生まれていないかもしれません。ひいばあちゃんはとてもやさしく、いろいろなことを教えてくれます。百さいをこえてもひいばあちゃんは生きてほしいです。こんなこわいせんそうは、もう二どとおきてほしくないと思いました。

４・９